

山村教室ベストセレクション

# 夢の広告

市川夏久

夢に広告を入れる技術が開発され、  
大きな成果を上げるが恐るべき副作用が……



中川英佑は夢を見ていた。子供の頃から何度も見ている夢だ。

大都市のターミナル駅の中を歩いている夢。すれちがう人はみなあわただしく通り過ぎていく。ふと気づいて足下を見ると靴を履いていない。靴下もなく裸足だ。床の感触がダイレクトに伝わってくる。裸足でいることにたまらない恥ずかしさを感じるが、まわりの人々は全く無関心だ。

裸足のまま構内を歩いて行くと列車乗り場に到着する。10本近い列車が停車する巨大なホームだ。大切な約束があるため早く列車に乗らねばならないのだが、どれに乗ったらいいのかわからない。列車のそばにある電光掲示板には見知らぬ地名が表示されている。

気がつくとも列車に乗っていて、いつのまにか動き出している。座席は対面式ではなく、通路をはさんで2席ずつ進行方向に向かって配置されている。

英佑は窓側の席に座り、外を眺める。列車は都市部を抜けて山間部に入っていく。線路はクネクネと曲がっている。やがて折り重なった山の隙間から海が見える。天気のせいなのか夕刻のせいなのか、薄暗くなってくる。列車は海沿いを走る。海は暗く、とても禍々しい印象だ。不吉な予感がする。

いったい列車はどこに向かっているのだろうか？

行き先もわからず、停車駅もわからない。ただひたすら海辺の線路を走り続けていく。列車から降りなくてはと思うが、どうすれば降りられるのか、いつ停まるかもわからない。英佑は

なすすべもなく座席に身を預けている……。

いつもは不安な気持ちのまま、そこで目が覚めるのだが、今回は違った。

車内販売の女性がカートを押しながら近づいてくる。カートには飲み物や弁当などが積まれている。カートは英佑の横で停まる。販売員の女性と目が合うと、心臓の鼓動が一気に高まった。

なんて素敵なんだと英佑は思った。整った顔立ち、くつきりと印象的な目、伸びやかなプロポーション……20代の半ばだろうか。どこかで会ったような気もするが、どこだったかは思い出せない。誰だったかな？

その女性販売員は英佑の顔を見ると、飲み物の缶を差し出した。ブルーの缶には『ジョーンズ』と商品名が書かれている。どうやら缶コーヒーらしい。

女性は英佑の顔をじっと見つめている。飲めということか。缶を開けて一口飲むと、女性が微笑んだ。とろけてしまいそうな笑顔。コーヒーの味とともに、甘い感覚が全身を駆け抜ける。堰き止められていたものが一気に流れ出す開放感……。

気がつくと、女性はカートを押しながら遠ざかっていく。その後ろ姿を追うために座席から立ち上がろうとする。

その瞬間、英佑は自宅のベッドで目を覚ました。

ぼんやりとした幸福感に包まれている。変だな。この夢を見たときに決まっていたらわかる不安感がない。口の中に缶コーヒーの味が残っているような気がする。それにしても、あの女は誰だろう？

歯を磨いているうちに夢の記憶はだんだんと薄れていった。

英佑はコンピュータシステムの会社で営業を担当している。その日は目が回るような忙しさだった。午前中2件、午後3件の得意先を回り、オフィスに戻ったのは5時前だった。

5時からは会議だ。会議室に部門全体の約50人が集まる。人の入れかわりが激しい会社なので、よく知らない顔もある。プロジェクトの進捗状況の報告が始まった。退屈な内容だ。いつも一方的な報告が30分以上続く。昼間の疲れもあって、英佑は睡魔に襲われた。

眠気を払うため首を回そうとして、一人の女性に目を奪われた。夢に出てきた車内販売の女性に似ている。というか、そっくりだった。あれ、あんな娘いたかな？

「あれ誰？」女性を小さく指さしながら、同じ課の田村に尋ねた。

「先月入ってきたシステムエンジニアの藤崎真名。入社のあいさつに来たけど、おまえちようどそのとき出張でいなかったんだよ」

先月ということは何度か姿は見かけたはずだ。どうして今まで気がつかなかったのか。

英佑は真名から目が離せなくなった。真名もその視線に気がつき、不思議そうな目で見返してくる。

その瞬間、英佑は激しい喉の渴きを覚えた。渴きはどんどん強まってくる。携帯電話がかかってきたふりをして席を立ち、会議室を出た。

何か飲まなくてはと思い、会社の1階にある自動販売機に向

かう。コインを入れて清涼飲料水のボタンを押そうとするが、選ぶことができない。喉は焼けつくように渴いているが、どれも飲みたくないのだ。それはこれまで味わったことのない奇妙な感覚だった。

英佑は会社を飛び出し、小走りで大通りに向かう。赤信号の横断歩道を強引に渡り、まるで引き寄せられるように一つの自販機に向かい、飲み物を買った。缶を開け、一気にあおる。とてつもない開放感とともに渴きが癒されていく。缶を見るとそこには『ジョーンズ』の文字があった。

夢との偶然の一致に驚いていると、いきなり目の前に息を切らした藤崎真名が現れた。真名は慌ただしくコインを自販機に投入すると、ボタンを押した。やはり缶コーヒーの『ジョーンズ』だ。缶を開け、一気にあおる。ようやく人心地ついたらしく、吐息とともに英佑を見て尋ねた。

「うちの会社の方ですよね？」

二人は互いに簡単な自己紹介をした。英佑も真名もS区の住民で、隣駅を利用してることがわかった。

「どうしてここまで買いに来たの？ 自販機は会社の1階にもあるのに」

「どうしてもこの缶コーヒーが飲みたくなって。会社の自販機には入っていないから」

真名は缶をじっと見つめている。

「もしかして、きみの夢にも出てきたの？ この『ジョーンズ』という缶コーヒーが？」

真名は小さくうなずいた。気のせいかな顔が赤らんだような気がする。この娘はどんな夢を見たのだろう。

真名が不審げな表情で呟いた。「でも、私どうしてこの商品がここにあるとわかったんでしょう」

「たぶん、通勤途中で何度か目にしていたんだと思う。無意識で憶えていたんじゃないかな」

自販機には目立つ文字で『ジョーンズ』と書かれていた。

——三ツ葉飲料本社社長室。

「S区の一部を対象にしたテストでは、明らかに効果が認められました！」宣伝部長が勢い込んで言う。

「本当に効果があったのかね？」社長の藤堂惣一は報告書をめくりながら疑わしそうに訊く。

「資料を見ていただければわかりますが、この地域の『ジョーンズ』の売り上げはうなぎ登りです」

確かにその地域の売上高は急上昇している。

「まさに科学の勝利ですな」広告代理店電奏の田所忠義は誇らしげに言う。

藤堂社長がフンと鼻を鳴らす。「小規模なテストということです許可したが、細かいことは聞いていない。どういう仕組みなのか説明してもらえるかな」

田所は笑いを顔に貼り付けたまま説明を始めた。

「これはK大学医学部の研究室が開発した手法です。その研究室では睡眠の研究を行っていました。特殊な周波数の電波を使うことで睡眠中の被験者の夢の中にメッセージを送ることを成功しました。最初はいまいましいイメージしか送れなかったのですが、実験を繰り返すうちにかなり明確な情報を伝えられるようになってきました。特にある商品についての情報を与えて

おくと、目が覚めた後、本人は訳もなく強烈にその商品が欲しくなります。この技術を応用すれば、圧倒的に安価で効果的な広告手法を実現できます。名付けて『A D D R E A M』プロジェクトです！」

藤堂社長が口をはさむ。「それは映像のコマとコマの間に商品の画像を挟みこむサブリミナル広告みたいなものか？ 禁止されているはずでは？」

「サブリミナル広告はアメリカでは禁止されていますが、日本では事実上野放しです。しかもこの広告は放送されるのではなく、個人の夢の中に現れるので問題ありません。現時点では副作用などの報告もなく、とても安全です」

藤堂社長はいいかわらず納得がいかない表情だ。「具体的にはどのように広告を発信するのかね？」

「現在は試験段階なのでテレビ中継車を改造したのから電波を送信し、対象地域をカバーしています。人々の多くが眠る午前零時から午前7時までの送信です。ゆくゆくは広い範囲に『放送』できるよう関係各所と調整中です」

宣伝部長が社長の顔色をうかがいながら言う。「社長、この広告手法は有望なので、テスト地域を拡大してはいかがでしょうか。現在2台の中継車を使ってS区の一部をカバーしていますが、ここは一気に台数を増やし、S区全体をカバーしたいのですが」藤堂社長の脳裏には不安と期待が交錯していた。人の夢の中に入っていくことなど許されるのだろうか？ 本当に危険はないのか？ こんな広告を打っているのが明るみになったときの世間の反応は？

しかし通常の手法では後発の三ツ葉飲料が『ジョーンズ』の

売り上げを伸ばすのは難しい。雇われ社長の身としては売り上げを飛躍的に伸ばし、自分への評価を高めなければ……。

藤堂社長は押し殺した声で言った。「やりたまえ、ただし秘密厳守でな」

## 2

またあの夢を見た。

いつもの列車に不安な気持ちで座っていると、真名そっくりの女性販売員がカートを押して現れた。

真名が「ジョーンズ」を差し出してくる。受け取った瞬間、英佑の中にこれまでと違う感覚が生まれた。

「これは夢なんだ」と明確に思った。

これまでもこの夢の中で、「これは夢なのでは？」と薄々感じていたのだが、不安や恐怖に支配され、はっきりと夢だとは考えられなかった。しかし今回は『ジョーンズ』という缶コーヒ―が出てきたことで、間違いなくこれが夢だとわかった。

自分がつくりだしている夢ならば、自分で展開を変えられるかもしれない。

英佑は座席から立ち上がると、真名の腕をつかみ、強引に隣の席に座らせた。

真名はいきなりの行動に驚いているようだったが、特に抵抗してはこない。不思議そうな目で英佑を見返してくる。

「きみは真名なの？」そう尋ねてみるが答えはない。

英佑は真名の肩に手をまわし抱きしめた。

柔らかな髪感触、かすかな香水の香り。車内販売用のエプ



ロンと薄いブラウスを通して心臓の鼓動がはつきりと伝わってくる。

英佑が唇を近づけると、真名は目を閉じた。

そのとき目が覚めた。口の中がカラカラだ。胸がどきどきしている。

英佑はそそくさと出勤の準備を終えると、ゆうべコンビニで買った『ジョーンズ』をカバンに放り込んで、家を出た。

駅に着くと、自販機と売店に人々が群がっていた。みんな『ジョーンズ』を買おうとしているのだが、売り切れのようだ。運よく買った人々は、うっとりした表情で『ジョーンズ』を飲んでいる。男も女も老いも若きも、みんな同じ缶コーヒーを飲んでいるのは異様な光景だった。何かが起きているのだが、それが何かはわからない。英佑はカバンから『ジョーンズ』を取り出すと、缶を開け一気に飲み干した。

オフィスに着いてインターネットで調べてみた。夢の中で自分が夢を見ていることに気づき、目覚めた意識状態で夢をコントロールすることを「明晰夢を見る」というらしい。そんなに珍しい現象ではないようだ。

普段なら夢を見ても、目覚めればすぐにその記憶は薄れ始めるのだが、今回は逆に鮮明になっていく。真名の姿が脳裏に焼き付いて離れないのだ。

——三ツ葉飲料本社社長室。

「S区全域で信じられないほどの効果が出ています」宣伝部長が報告する。「売り切れが続出しているので、急遽別の地域から

商品を回しているそうです」

広告代理店電奏の田所がニヤリと笑う。「予想通りですね。これでもっと広い地域で展開する目処が立ちそうです」

藤堂社長は依然納得のいかない表情だ。「何度聞いても、今ひとつ仕組みがわからないのだが」

田所の顔に一瞬、いらだちの色が浮かぶが、すぐに笑顔になって説明を始めた。

「中継車から送信される電波には御社の『ジョーンズ』についての情報が含まれています。この電波がレム睡眠中の人々の脳に働きかけ、夢の中に『ジョーンズ』を登場させます。テレビ放送なら映像が画面の上に現れますが、この広告は人々の脳の中に現れるのです」

「しかし、そんなことができるとは、やはり信じられん」

「私たちはテレビを当たり前のものだと思っていますが、発明された当時は映像を変換して電波に乗せ、画面に映像を映し出すなど魔法のように思えたはずですよ。今では仕組みなど気にせず、誰もがテレビ放送を楽しんでいます。大切なのは仕組みではなく、それができるといふ事実ですよ」

「みんな同じ夢を見るのかね？」

「人によってそれぞれです。電波が潜在意識の奥深い部分に働きかけ、その人にとって好ましい状況、好きな人物とともに商品が現れるよう調整されています。CMの制作費もタレントの出演料も不要なため、大幅なコスト削減が可能です」

藤堂社長はなおも心配そうだ。「本当に副作用はないのかね？」

田所は肯いた。「重大な副作用の報告はありません。夢と現実の区別がなくなっただけという報告がごくまれにありますよが、

いずれも軽微なものです。しかもこの広告手法は一部の広告主様以外には極秘扱いなので、たとえ副作用が問題になったとしても、ご迷惑をおかけする心配はありません」

「もっと広い地域で展開できるのか？」

「東京スカイツリーの送信設備を使い、より広い範囲に電波が届くよう準備中です。まずは首都圏、いずれは全国に展開する予定です」

藤堂社長はようやく笑顔になった。「そうか、それでは『ジョーズ』を増産せねばならんな」

英佑はその後数回あの夢を見た。毎回、真名を抱き寄せて口づけしようとするのだが、そこで目が覚めてしまう。眠っている時間が足りないのかと思い、夜10時頃から寝てみたが、結果は同じだった。

列車内という衆人環視の中にいるせいかもしれない。人に見られることに抵抗があるのかも。ならば列車から降りて、人目につかないところへ行けばいいのではないか。今度あの夢を見たときに実行しようと決心した。

夢の中、カートを押す真名の姿が見えたところで、英佑は席を立った。通路を小走りで進み、車掌の姿を探す。2両ほど進んだところで、車掌を見つけた。穏やかそうな印象の初老の男だ。

「次の駅に停まるまで、あとのどのくらいですか？」

車掌は手帳と腕時計と見る。「あと約10分で次の停車駅です」  
英佑は急いで自分の席へ戻る。ちやうど真名が英佑の座席の

横に来たところだった。いつものように腕を引き寄せ、隣に座らせる。今回はそのまま何もせず、列車が次の駅に停まるのを待った。

やがて列車は速度を落とすと、見知らぬ駅のホームにすべり込んだ。

真名の手を取って立ち上がらせる。手を引っ張ると、かすかな抵抗を感じた。かまわず手をつかんだまま列車の乗降口へ向かう。

ホームには駅名表示がなかった。地方ならどこにでもあるようなありふれた駅だ。以前降りたことがあるような気がする。改札を出ると、ロータリーの向こうに巨大なホテルがそびえていた。真名の手をつかんだまま、ホテルに向かう。

真名は顔をしかめ、身を固くしている。嫌なのだろうか？手をつかむ力がゆるんだすきに、真名が逃げ出した。英佑は後を追う。すごい速さだ。全速力で走り、やっと追いつく。

「いったい何考えてるんですか！？」真名が怒りをあらわにした目でにらんでくる。

英佑は心を落ち着かせ、自分に言い聞かせた。これは夢なんだ。自分の夢なのだから自分でコントロールできる。夢だとわかっているのだから、展開を変えられるはずだ。意識をしつかり持って、夢の流れにのまれるのではなく、自分で流れを作れ。

次の瞬間、英佑と真名はホテルのベッドに横たわっていた。二人とも全裸だ。英佑は自分が『ジョーンズ』の缶を持っていることに気がついた。窓を見ると、曇り空の下に灰色の海が見える。

英佑は『ジョーンズ』を一口飲むと、缶をベッドサイドテー

ブルに置き、真名におおいかぶさっていった。やわらかくひんやりした肌感覚、かすかに香るフルーツのような香り。はりのある形のいい乳房が英佑の胸の下でつぶれ、身体全体が吸い付いてくる。

抱きしめて口づけをすると、真名の身体から力が抜けていく。英佑は気がおかしくなるくらい興奮していた。はやる気持ちを抑え、できるだけやさしく真名の身体に触れる。

真名があえぎ始める。英佑は時間をかけて愛撫を続け、やがてゆっくと挿入した。しばらく動いていると、これまで経験したことがないような快感の波が押し寄せてきた。波はさらに大きくなり全身を包み込んでいく。

激しい射精の感覚とともに目覚めた。

感覚だけで、実際には射精していなかった。英佑は半ばあきれながら思った。10代の頃でも、こんなに激しくリアルな夢を見たことはなかった。それにしてもこの快感は本物だ。現実と区別がつかない。おれは一体どうなってしまったんだろう？

—— 広告代理店電奏の会議室。

田所忠義は『AD DREAM』の報告書に目を通しながら、満足げなため息をついた。S区で行った三ツ葉飲料のテスト広告は大成功だった。売り上げは3倍増になり、なおも急増中だ。

「今後の展開はどうなっている？」と田所は部下の榊田和子に尋ねた。

榊田は長い髪をかき上げながら答える。「対象地域をS区から首都圏に、さらに全国へ広げられるよう調整中です」

田所はタバコに火をつけた。会議室にいるメンバーが露骨に顔をしかめるが、かまわず煙を吐き出した。「クライアントは？」  
「三ツ葉飲料以外には自動車、化粧品、家電メーカーなどと交渉中です。いずれも業界トップの企業ではなく、売り上げが伸び悩んでいる商品を抱えている企業です」

「広告の秘密は守れそうか？」

入社3年目の猿渡淳がタバコの煙を手で払いのけながら答える。「秘密保持には細心の注意を払っていますが、プロジェクトが大きくなれば、どこからか漏れる可能性は高まります」

「まあしかたないか」田所は盛大に煙を吐き出す。「夢に広告を出すのを取り締まる法律があるわけじゃない。バレたらバレたで何とかなるだろう。他に特に問題は上がっていないか？」

「それなんです」榊田が気づかわしげな表情で口を開く。「K大学の研究室から副作用についての新たな報告があります」

「ああ、夢と現実の区別がつかなくなるというやつだろ。でも目が覚めればすぐに元に戻るはずだよ」

「それが、人によつては大きな影響を受けるらしいんです」

「どんなふうになるの？」

「……おかしくなるそうです」榊田は言いにくそうに答える。

「考え方や価値観がすっかり変わって、いきなり仕事を辞めたり、家を出ていく場合があるようです」

一瞬、会議室の空気が凍りついた。今になってそんな副作用が出てくるなんて……。

田所が場を取り繕おうとする。「でも、みんなそうなるわけじゃないんだろ？」

「はい、調査のサンプル数がまだ少ないので、確かなことは言

えないそうです。個人差もかなりあるようなので。しかし安全性が確認できるまで、大規模な展開は待つてほしいということです」

「今さら何を言ってるんだ。ここまで来たらもう後には戻れないぞ」田所は強い口調で言った。「それに退職や家出ならマスコミも取り上げないから問題にはならないはずだ。これまで通りゴーだ、ゴー！」

『A D D R E A M』プロジェクトのメンバーには、今回のテスト対象エリアであるS区に住んでいる者はいない。テストの客観性を確保するために、S区在住者はメンバーから外してあるのだ。メンバーたちは「自分たちと家族は大丈夫」と胸をなでおろしたものの、今後のプロジェクトの進行に底知れぬ不安を感じていた。

### 3

夕闇が迫る街に灯りが瞬き始める。かすかに残る夕焼けが深いブルーに溶け込み、風景が夜の表情に変わっていく。

英佑は高層ホテルの最上階にあるバーのカウンターに座り、隣に座る真名の横顔を見つめた。

ようやく真名を誘うことができた。

以前の英佑なら、個人的に誘うことなど、とてもできなかっただろう。しかしあの夢を見るようになってから、英佑の中で何かが変わった。夢をコントロールすることで、自分が夢の登場人物の一人ではなく、自分が夢を作り出しているということがわかったのだ。自分が夢に含まれているのではなく、自分の

中に夢があるという感覚。状況に翻弄されるのではなく、状況を創り出すということ。

その感覚は目が覚めた後、現実を生きる際にも続いていた。これまでは人間関係のしがらみや立場などを考えて、言いたいことがあっても言わないですますことが多かった。しかし最近では自分の中で溜めることがなくなってきた。会議でも思ったこと、感じたことを素直に発言するようになった。まわりの響感を買っているのはわかっていたが、不思議と気にならなかった。真名を夢の中で何度も抱くうちに、英佑の中に曰く言い難い感情が育っていった。それはこれまでに経験した恋愛感情とは全く別のものだった。実際に会って話すことで、この感情を見極めたかった。

真名はシャンパンを一口飲むと、英佑に顔を向けた

「中川さんはどんな夢を見ているんですか？」

いきなりの質問に英佑はたじろいだ。「行き先のわからない列車に乗っている夢なんだ」

「誰が出てくるんですか？」

「君だよ」

「私はどんな役回り？」

「車内販売の売り子なんだけど」本当のことを言うべきかどうか迷った。ええい、言ってしまう。「ぼくとセックスする」

真名の顔がぱつと赤くなる。首筋まで真っ赤だ。消え入りそうな声で訊く。「どんな感じですか？」

「何が？」

「私とのセックス」

「よかったよ」



「どのくらい？」

「これまで経験した中で最高かもしれない」

怒るかと思ったが、真名は笑顔になった。「私は中川さんを幸せにしているんですよ？」

英佑は肯いた。「きみのはどんな夢？」

真名は窓に視線を移し、夜景を見つめた。

「ずっと前から何度も見ている夢があるんです。得体の知れない恐ろしい怪物に追いかけられる夢。つかまったらきつと殺されるから、必死で逃げます。街の中や山の中を走ったり、海に飛び込んだり。そのうちビルに逃げ込むんですが、やっぱり怪物は追いかけてくる。階段を必死に駆け上がって上の階に逃げますが、すぐに屋上に出してしまう。目の下には街が広がっていて、もう逃げる場所がない。怪物が屋上に向かってくる気配があります。どうしよう……殺されると思ったところでも目が覚めるんです」

「その夢はいつごろから見ているの？」

「中学ぐらいからだと思います。でも最近見る夢は少し違うんです」

「どんなふう？」

「怪物に追われて屋上に行き、逃げ場がなくなるところまでは同じなんです。飛び降りたら死ぬなど思いながらビルの下をのぞきこんでいると、突然ある人が現れるんです」

英佑は、一瞬それが自分ではないかと期待した。「誰なんだい？」

「学生時代からつきあっていて、去年別れた人。にっこり笑いながら、缶コーヒーを差し出すんです」

『ジョーンズ』を？」

真名は肯いた。「それを一口飲むと、すごい安心感が広がるんです。ああ私は大丈夫だと。彼は私を抱くと、ビルからジャンプします。私たちは落ちずにそのまま空を飛んでいきます。海に出てしばらく飛ぶと、きれいな砂浜が見えてきて、そこに降ります。私と彼はビーチチェアに並んで座って、一緒に『ジョーンズ』を飲むんです」

「幸せそうだね」

「ええ、とっても。私は思い切って、別れて寂しかったことを彼に伝えます。そしたら彼もそうだったと言って、私にプロポーズするんです。そこで目が覚めるんですけど、起きた後もじわりした幸福感があって」

「すごく『ジョーンズ』が飲みたくなった？」

「ええ、とっても。会議を抜け出して買いに行ったとき、中川さんと会いましたよね。もともと缶コーヒーなんて飲まなかったんですけど、今ではすごく好きになって」

英佑はマティーニのオンザロックを一口すすった。「その夢は何度も見たの？」

「ええ、何度も。だけど、単なる夢じゃなかったんです」真名の顔がほころんだ。「なんか気になって連絡してみたんです」

「連絡って、夢に出てきたモト彼に？」

「はい。こんなに何回も夢に出てくるのは何かあると思って。そしたら、また会おうということになったんです」

「すぐに会ったの？」

「それがすぐというわけにもいなくて。私出身が札幌なんです。大学まで札幌で、卒業してから東京に出てきました。彼と

は遠距離恋愛だったんです。だからすぐには会いに行けなくて、やっこの前の連休に会ってきました」

「どうだった？」

「彼は最初驚いてましたけど、すぐに打ち解けて。つきあっていたころと同じ感じに戻りました」

「復活したわけだ」

「そうなんです」真名は本当にうれしそうだった。「たぶん私、再来月には会社を辞めて札幌に帰ります。彼は地元で就職したので、結婚して一緒に暮らすつもりです」

英佑はマティーニを飲み干した。

「どうしてふたりの夢に『ジョーンズ』が出てくるんだろう？」

「さあ、わかりません。でもわたしにとっては『ジョーンズ』さままです。あの夢を見なければ、彼に連絡することもなかったですから」

英佑はバーテンダーを呼び、飲み物のおかわりを頼んだ。街はもうすっかり闇に包まれ、無数の灯りが瞬いている。

「その夢を見ているとき、それが夢だと気づいていた？」と英佑は尋ねた

「『ジョーンズ』が出てきたところから、うすうす夢じゃないかとは思っていました。彼と一緒に空を飛んだときには、これは夢だと確信しました」

「きみは夢の内容をコントロールしようとしたんだ？」

「ええ、夢の中でも彼に寂しかったと伝えるにはすごく勇気がいりましたから。そこまでは受け身でただ夢を見ていただけでしたけど、あの時は普段だったら絶対言えないことを言えましたからね」

「これは夢だとわかっているから言えたんだね？」

「はい」真名は肯いた。「でも、夢と現実の違いっていったい何でしょうね？ 今この瞬間が夢じゃないって本当に言えるんでしょうか？」

「これは現実だよ。だって今朝起きたのを覚えているからね」  
「でも、その起きたっていう記憶も夢だったら？」

英佑は一瞬たじろいだ。足元が崩れていくような感覚を覚える。「確かに夢じゃないっていう証拠はないけど」

「そうですね」真名は新しく運ばれてきたグラスに口をつけた。「私はあの夢を見るまで、いつもただ夢に巻き込まれるだけで何もできませんでした。でも初めて夢の中でこれが夢だと気づき、自分の意志で夢の展開を変えることができたんです」

「そしてきみの現実も変わった」

「そうなんです。現実というのは自分ではどうしようもないことだと思ってきました。でも最近思うんです。夢が変えられるなら、現実も変えられるのかもって」

「そうかな？」英佑もあの夢のせいか、自分が以前より積極的に現実に関わりかけられるようになったとは感じていた。だが現実とは堅固なものだ。さまざまな出来事を自分一人が決めているわけではない。自分の意思だけで現実を変えられるとは思えなかった。

バーを出た後、二人でエレベーターに乗った。真名は少し酔っているようだった。降下するエレベーターの中で、英佑は真名を抱きたいと強く思った。身体の奥底から激しくこみ上げてくる衝動。夢の中だけではなく実際に真名を抱きたい。それは全身に火がついたような感覚だった。

しかし、これは夢ではなく現実だ。夢のようにはいかない。英佑は思った。真名には結婚を決めた相手がい、会社の同僚だ。歳も離れている。誘って断られたら格好がつかない。そんな考えが英佑の頭の中を駆け巡った。エレベーターが1階に着いたとき、英佑は思い切って言った。「今夜は一緒にいたい」

真名は小さく肯いた。

英佑はホテルのフロントに行きスイートルームを取った。鍵を受け取り、再びエレベーターに向かう。真名は何も言わずに歩いてきた。

部屋に入るとすぐに抱き合った。夢の中で何度も抱いた女性を、現実には抱くのは奇妙な感覚だった。英佑は真名の服をゆくりと脱がし、丁寧な愛撫を加えていった。抱きしめた感覚、唇の感触は夢とほとんど同じだったが、部分部分の柔らかさや弾力、においなどはわずかに違うように感じられた。やがて挿入し果てたとき、激しく射精した。本当に射精するのが夢と違うところだった。これこそ「夢が叶った」ということなのかなと英佑は思った。

喉がからからだったので冷蔵庫を開けてみると、ビールなどにまじって『ジョーンズ』が2本入っていた。取り出して1本を真名に渡す。

「どうしてつきあってくれたの？」英佑は尋ねた。

「以前の私だったら絶対こんなことはしなかったと思う。でも最近ほしたい思ったことは、必ずするようになったの」

「それはあの夢のせい？」

「たぶん」真名は髪をかきあげながら『ジョーンズ』を一口飲んだ。「夢を作りだしているのは自分ですよ。じゃあ現実を作

り出しているのは誰？」

「現実には誰かが作っているわけじゃなくて、みんなの活動の結果、生まれてくるものだと思うよ」

「私は最近、自分の現実を作り出しているのは自分じゃないかと感じているんです」

「うーん……」

「自分が作り出しているものなら変えられるはず。怖い夢、嫌な夢を、楽しい夢、素敵な夢に変えられるように。嫌な現実を楽しい現実に変えられるはず」

「そんなことが本当にできたらいいけどね」

「中川さんはさつき、エレベーターの中で現実を変えましたよね。私を抱きたいと思い、誘おうと決心した」

確かにその通りだ。あの時、自分は現実を変えた。意識を集中し強く願うことで、状況に流されるのではなく、状況を支配した。

「夢の中で目覚めれば夢の展開を変えられるように」真名は言った。「現実の中で目覚めれば、現実の展開を変えられるはず」現実の中で目覚める？ 英佑はふいに「ブツダ」とは「目覚めた人」という意味だということを出した。

「だけど、どうすれば現実の中で目覚めるなんてことができるのかな？」

「夢の中で目覚めるきっかけは、自分は眠っているんじゃないか、これは夢じゃないかと疑うことですよね。ということは現実でも、自分は眠っているのでは、これは現実ではないのではと疑うことがきっかけになるはずだ」

現実を疑う……そんなことこれまで考えたこともなかった。

「しかし、自分で現実を作っているとすると、体験していることとすべては自分の責任ということになるよね。たとえば事故とか病気とか」

「だけど自分が作り出したものなら、自分で対処できるし、変えられるはず」

英佑は真名の話を聞くうちに、「現実」という強固な構造物が飴細工のように溶けていくような感覚にとらわれていた。こんな話に共感を覚えるのも、あの夢を見たせいなのかもしれない。

#### 4

英佑は夢を見ていた。

列車は山間を縫うように走り、海沿いに出た。あたりが暗くなってくる。列車がどこに向かっているのかは相変わらず不明だ。漠然とした不安は感じるが、これが夢だとわかっているのが不安が恐怖へとエスカレートすることはない。

真名が車内販売のカートを押しながら近づいてくる。これまでなら腕を取って隣に座らせたのだが、現実で真名を抱いた後ではそんな気は起こらない。真名が座席の横に来て『ジョンズ』を差し出す。英佑は缶を受け取って一口飲むと、窓の外を眺めた。しばらくして通路に視線を戻すと、遠ざかっていく真名の後ろ姿が見えた。

夢をコントロールできるのはわかっていたが、どういう展開にしたいのか自分でもわからなかった。大富豪になったり、超一流のスポーツ選手になったり、絶世の美女を抱いたり……夢の中では何でも思いのままだったが、そうしたことに今ひとつ

魅力を感じなかった。まわりから特別な存在として大切に扱われたり、普通では手に入らないものを手に入れられるのは気分がいいだろうが、それで本当に満足なのか？ 自分が本当に望んでいることは何だろうか？ 真剣に考えてみたが何も思いつかなかった。英佑は考えるのをあきらめ、身体の力を抜いて目を閉じた。

列車が軽く揺れた。様子が変だ。英佑は窓の外を見た。眼下に海が見える。陸地も線路も見えない。どうやら飛んでいるらしい。

列車は離陸時の飛行機のように頭を上げ、速度を上げながら上昇を続けていた。身体がシートに押しつけられ、通路の前方が上方に傾いている。ジェットエンジンのような高周波のうなりと軽い振動を感じる。

空の色は深いブルーで、雲の一部が残照で赤く染まっている。列車は厚い雲の層を抜け、さらに上昇している。ブルーの空はやがて黒に変わり、星が見えてくる。しばらくすると眼下に青い球体が見えてきた。地球だ。いま、自分は宇宙から地球を見ている。

列車は地球を回る軌道に入ったようだった。ところどころに雲がかかり、海と陸地に無数の生命の存在が感じられる。地球全体が生きているようだ。すばらしい眺めから目が離せなくなった。

気がつくといつのまにか車内から出て、宇宙空間を漂っていた。見上げると漆黒の闇の中に無数の星が、見下ろすと青く輝く地球があった。宇宙服を着ていないのに、楽に呼吸できる。寒さや暑さも感じなかった。自分も含めてすべてが一体である



ような感覚。胎児として羊水に浮かんでいるのはこんな感じなのだろうか。

足を動かしてみると宇宙空間を移動できることに気づいた。眼下の地球の上を「歩いて」いるような感覚が面白く、だんだん足を動かすペースが速くなってくる。それにつれて移動速度も上がり、地球の風景がどんどん変化する。

前方に小さな物体が見えた。自分と同じくらいの高さに浮かんでいる。近づいていくと物体はどんどん大きくなってくる。それは直径20メートルはある巨大な黒い球体だった。そばまで近づいて表面に触ってみる。磨き上げられた石のように滑らかで、熱くも冷たくもない。光が当たった部分が鈍く輝いている。

いきなり球体の表面に丸い穴が開いた。穴はどんどん大きくなり、ひと一人が通れるほどの大きさになった。穴から白くまばゆい光が射してくる。強い光のせいで穴の中を見ることができない。

直感が入るべきだと告げていた。英佑は光の中へと入っていく。光はいつそう強まった。光源は球体の奥、ちょうど目の高さあたりに浮かんでいる。光源を見つめても不思議とまぶしくはなく、懐かしいような感覚をおぼえた。英佑は光源に歩み寄り、2メートルほど離れた場所に立った。

光の色が変化している。白からうすいブラウンに、そして肌色に……。気がつくとも目の前に一人の女性が立っていた。白く光沢ある生地服に身を包んだ白人女性。吸い込まれそうな瞳、短く切りそろえられた髪。神々しいまでに気品ある美しさに圧倒される。

英佑は目の前の女性が世界的に有名な女優にそっくりなこと

に気がついた。何度かテレビの洋画劇場で観たことがある。確か10年以上前に亡くなったはずだが。

女性は英佑の目を見つめた。

「何が望み？」女性の声が聞こえた。口は閉じられたままなので、思考が直接頭の中に送り込まれているようだ。

望み？ 英佑は考えた。やはりわからない。

「自分が本当に何を望んでいるかわからないんです」英佑は声に出して言った。「何をすべきなのか、どうなりたいたのか……自分の進むべき道が」

次の瞬間、英佑は平原の真ん中に立っていた。

空には雲一つなく、さわやかな風が吹き抜けていく。平原の周囲には高い山々が連なり、あたり一面、緑が生い茂っている。ところどころに畑らしいものがあり、果物を作っている。葡萄畑だろうか。平原のはるか下方に、街らしきものが広がっていた。

「おはようございます」見知らぬ男女が近づいてきて英佑にあいさつする。男女は20代前半くらいで、白いつなぎを着ている。とても仲が良さそうだ。英佑もあいさつを返す。二人の表情がとても印象的だった。ストレスや邪心がみじんも感じられない顔。一切の心配から解放され、心からリラックスしている。

英佑は自分の心の中を探ってみた。これまで常に感じていた不安や焦りがすっかり消えている。自分は物心ついてから、ずっとこの世界は本当の自分の居場所ではないと感じていた。どうしようもない居心地の悪さと違和感があった。今はそうした不快な感覚は消え失せ、ただ平穏だけがあった。心がとても落ち着いている。

英佑は畑の方へ向かった。畑では5く6人の男女が働いていた。全員が笑顔で迎えてくれる。一人の美しい女性が英佑にほえみかけてくる。英佑はこの場所こそ、自分の本当の居場所だと理解した。

深いやすらぎとじんわりした幸福感に包まれて英佑は目を覚ました。今まで夢をコントロールしようとしてきたが、コントロールを手放して何か大きなものに委ねたら、思いもよらないビジョンを見ることができた。それはまさに心の深い部分で望んでいながら、どうしても辿り着けないビジョンだった。そのビジョンの前では、これまでの生活や人間関係、勤めている会社など、築き上げてきたものすべてが意味を失った。

このビジョンを現実化するにはどうしたらいいのか？

英佑の意識は冴え渡り、頭脳はビジョン実現のためにフル回転を始めた。

## 5

「副作用っていつでも、そう深刻なものじゃないんですよね？」  
田所は『AD DREAM』の実験を取り仕切るK大の山根真一教授に尋ねた。

「ええ、まあ……」山根教授は少し落ちた眼鏡を上げながら口ごもった。「深刻というのとは少し違うかもしれませんが……どう言えればいいかな」

今ごろ何を言いやがると田所は思った。『AD DREAM』を首都圏全域で展開する準備は着々と進んでいる。この段階で

プロジェクトを中断するわけにはいかない。カネもヒトもかなりつき込んでいるので、中止となったら自分のクビが危ない。矢も盾もたまらず、山根教授の研究室に押しかけたのだ。

「身体的には何の危険もありません」と山根教授は言った。「しかし、夢を見た人の現実認識に影響を与えるようですよ」

「夢と現実の区別がつかなくなるというやつですか？」

「いや、そう単純なことではありません。『AD DREAM』は夢の中に広告を打ちたい商品、たとえば『ジョーンズ』を登場させます。望んでいる状況や好きな人物とともに商品が登場するので、効果抜群です。しかし、夢の内容——夢の舞台や設定、登場人物などを固定してしまう傾向がある。被験者はくりかえしその夢を見るうちに、商品が出てくると『これは夢だ』と気づいてしまう。夢の中でこれが夢だと気づいている状態、つまり明晰夢を見るわけです。それ自体は問題ありません。誰でも夢の中でこれが夢だと気づくことはある。しかし、ほぼ同じ内容の明晰夢を連日見ることはまれです」

田所はタバコをくわえた。テーブルの上を見回すが灰皿は見当たらない。かまわず火をつけ、深く吸い込む。「連日見ることにどんな問題があるのですか？」

「夢の中でそれが夢だと気づいたとき、多くの人は夢の内容を自分の意思で変えようとします。『夢の中で目覚めて』いれば夢をコントロールできることに気づくのです。しばらくは夢をコントロールすることに熱中します。夢の中では何でもできるし、望んでいたことを叶えられる」

田所は怪訝な表情を浮かべた。「そのどこが問題なのですか？」

「夢をコントロールしているうちにだんだんそれにも飽きてきます。そのうちに夢がコントロールできるなら、現実もコントロールできるのではないかと思いはじめます」

「なんでまた、そうなるんですか？」

「夢を見ているとき、これは現実ではなく自分が作り出したものだと気づくことで夢をコントロールすることができます。同じように目覚めているときも、これは現実ではなく自分が作り出した幻想に過ぎないと感じてしまうことで、現実をコントロールできると思うのです」

田所はタバコの灰を床にまき散らしながら笑った。「でも、現実をコントロールするなんて無理な相談だ」

「常識的に考えればそうですね。しかし確固たる意志を持つて望む方向に人生を変えたなら、それは現実をコントロールしたことになるでしょうか？」山根教授は田所の目を見つめながら言った。「誰もが夢や願望を持っています。だが多くの人が親や社会に植え付けられてきた思い込み——『自分には価値がない』『人生は思い通りにはならない』という信念によって、夢の実現をあきらめてしまいます。人生というのは状況に流されていくものだという受け身の姿勢が確立するのです。しかし、夢を自由にコントロールするうちに、夢だけではなく現実も確固たるものではなく、自分の意識次第で変えられる可能性に気づくのです。現実の中で目覚めることで、現実には巻き込まれるのではなく現実を支配することができます。そうした意識を持つだけで、その人の人生は大きく変化します。そして、忘れかけていた夢や願望の実現に本気で取り組み始める。実際にそれができるということよりも、できると思ひ込むことのほうが力を

持つのです」

「眠って見る夢によって、長年抱いていた夢が叶うわけですな」  
田所は短くなったタバコを床に落とし、靴で踏みつけて火を消した。「結構なことじゃないですか。何の問題もない」

山根教授は大きく首を横に振った。

「個人の視点から見ればいいかもしれませんが、家庭や企業など社会的な視点から見ると大問題です。これまでは多くの人が不満を持ちながらも、家庭に居続け、会社に勤め続けていた。その背景にはある種の『あきらめ』や『割り切り』がありました。そうした妥協はいわば接着剤のような役割を果たし、社会の維持に役立っていた。しかしそれが失われると家庭も会社もバラバラになり、社会が崩壊してしまうかもしれない。みんなが好き勝手に自分の夢や可能性を追求し出したら、いったいどうなると思いますか？」

「それはそれでいいんじゃないの？ みんなが人から命令されたことではなく、やりたいことをやるようになる。これまで世の中を牛耳ってきた連中は困るかもしれないが……」

「問題は社会の崩壊だけではありません」山根教授が慌ててさげすむ。「人によって夢や願望はさまざまです。歌手になりたい、起業したい、スポーツ選手になりたいというような夢ならそれほど害はないでしょう。問題なのは、気に入った異性を相手の意思を無視してでも自分のものにししたい、ある人物の存在を消したい、人々を支配したいなどの願望を持った場合です。そうした人々が犯罪に走る危険性がある」

「実際にそんな例があるのですか？」

「S区ではストーカーや強姦などの犯罪が増えているようです。」

また、住民の家出や失踪も相次いでいます。調査中のため今回の実験の結果だとは断言できませんが、影響がはつきりするまで、『AD DREAM』の大規模な展開は待っていたきたい」

田所は目をむいた。「そうはいきません。このプロジェクトにどれだけ注ぎ込んでも思ってるんですか？ 先生の研究室にもたっぷりお払いしているでしょう？ 今さら中断など考えられません」

「しかし、どんな結果になるか予想もつきませんよ」

田所は拳を振り上げながら言った。「毒を食らわば皿までです。ここまで来たら、なるようにしかならん。このプロジェクトで抑えつけられていた人々の夢と願望を解放するのです。ゴーです、ゴー！」

高原で仲間たちと果実を作っている夢を見てから、英佑の関心はそのビジョンを実現することだけに絞られた。会社の仕事は忙しく、早朝にオフィスに向かい、機械的にやるべきことをこなし、終電で帰ってくる生活が続いた。仕事には身が入らなかつたが、不思議なことにこれまでより成果が上がった。しかし、そうした中途半端な生活を長く続けることはできず、夢を見た日の翌日には会社を辞めた。いきなり退職願を出したので、上司は驚き、さんざんひきとめようとしたが、英佑は全く耳を貸さなかつた。

退職の日、オフィスの私物を宅急便で自宅に送り、同僚にそそくさと別れを告げると、会社を出た。自宅から一駅離れた場所にある中央図書館へと向かう。夢で見たビジョン実現のための情報を集めるつもりだった。

あの高原はどこにあるのか？ 日本だということとは間違いない。山に囲まれた高原で、葡萄を栽培している。手がかりがつかめれば、すぐその場所へ行ってみたい。もし、ここだと確信が持てたら、いま住んでいるマンションを引き払って、移り住むつもりだ。

ターミナル駅で自宅方向に向かう私鉄に乗り換える。英佑は電車内の雰囲気がいっもと違うことに気づいた。乗客がまばらなのだ。時計の針は午前11時を指している。こんな時間にこの方向の電車に乗ることはないので確かなことは言えなかったが、それにしても人が少なすぎる。

英佑はいつも通勤で利用する駅の隣駅で降りた。駅の構内は閑散としている。改札を出ても人影はまばらだった。平日の昼間なら数多く見かけるはずの主婦の姿がほとんどない。そのかわりパトカーと警官の姿がやたら目についた。誰か要人でも来ているのだろうか。

駅前の商店街を通り、図書館へと向かう。ほとんどの商店がシャッターを降ろし、人通りがない。まるでゴーストタウンのようだ。路上にはゴミが散乱し、ガラス窓を割られている商店もあった。

この街はいつのまにか、こんなに荒んでいたのだ。英佑が日頃利用する駅の周囲は住宅がほとんどで、商店街はない。早朝に自宅を出て、すぐそばの駅から会社に向かい、深夜に帰宅するという生活を続けていたため変化に全く気がつかなかったのだ。だが、会社の周囲や仕事で訪れる街々にはとりたてて変化は感じられない。この地域でいったい何が起きているのだろうか？



ほとんどがシャッターを降ろしている商店街の中で、営業を続けているそば屋があった。空腹を感じた英佑はのれんをくぐった。

60歳くらいの痩せた店主が顔を上げ、小さく「いらっしやい」と迎える。店主の身体からは生氣というものが全く感じられず、目が真っ赤だった。英佑は一気に食欲が失せるのを感じたが、椅子に座り、ざるそばを頼んだ。

天井近くに設置されたテレビは主婦向けのワイドショー番組を映している。ほどなく、そばが運ばれてきた。恐る恐る口に運ぶと、予想していたよりずっとうまかった。そばにはこしがあり、つけ汁はだしのうまみが効いていた。

一気に食べ終わり、顔を上げると、そば湯を運んできた店主と目が合った。やはり目が異様に赤い。

「お客さん、このへんの人？」店主が尋ねる。誰かと話したくてたまらない様子だ。

「はい、隣の駅ですが……」英佑はそば湯を注ぎながら言った。「この商店街で何があったんですか？」

「そりやあもうメチャクチャよ」店主はよくぞ訊いてくれたという口調で答えた。「みんなどうかしちまいやがった。うちの奴はいきなりお遍路とか言つて家を飛び出すし、娘もアメリカで歌の勉強をするとか言つて、出かけたまま連絡もとれねえ。この商店街だけでもいきなり出て行った奴がいっぱいいるよ。残った連中もみんな店を辞めちまうし」

「この商店街だけなんですか？」

「いいや、このあたりの住人も突然おかしくなつて会社を辞めたり、いなくなつちまうのが多いらしい。寝たきりの老人なん

かが家族に置き去りにされて、どう面倒をみるか役所の方でも困っているらしいよ」

「ご主人は何ともなかったの？」

「それがよくわからないんだよ」店主があごを撫でた。「わたしみたいなのは例外らしい。引きこもりって言うんだっけ、そういう連中もあまり影響を受けないらしいけど……」

「奥さんと娘さんは夢の話をしていなかった？」

「ああそういえば、夢がどうか、訳のわかんねえことを言っていたな」

「ご主人は夢を見なかった？」

「わたしや不眠症でね。夜はほとんど眠れねえんだ。昼の休憩時間にちよつとウトウトするぐらいで、夢なんか見ねえな」

なるほど、極端な寝不足であんなに目が赤いのか。引きこもりと不眠症——夜眠らないと影響を受けないのかもしれない。

夢を見ることと今回の出来事にはやはり深い関係があるようだ。「これからどうなっちゃうのかね？」店主が投げやりな口調でつぶやいた。

いまのところ、テレビも新聞も、この現象を伝えてはいない。同僚や取引先との間で話題に上らなかったところをみると、この地域だけに発生しているようだ。仕事や家族の世話を放棄し、失踪するなどという現象が広い範囲で発生すれば、すぐさま大問題になるはずだ。こんな現象が全国に広がれば、この国はどうなってしまうのだろうか？

——三ツ葉飲料本社社長室。

「いよいよ今夜ですね」田所は待ちきれないといった様子で言

った。

藤堂社長は満足げなため息をもらした。「ようやくここまでこぎつけたな」

いよいよ今夜、午前零時から『AD DREAM』の電波が首都圏全域に送信される。S区で行った実験によって『ジョーズ』の売り上げは急上昇し、その有効性は実証された。だが『AD DREAM』を首都圏全域で展開するには、多くの準備と調整が必要だった。

首都圏への展開と同時に商品の売り切れが予想されるため、藤堂社長はいくつもの生産ラインを『ジョーズ』用に切り替えた。秘密保持も面倒だった。『AD DREAM』という広告手法が世間に知れたとき、どのような反応が起こるか予想がつかない。おそらく夢の中に「侵入」されたことに憤慨する人々もいるだろう。画期的な広告手法が世間の声でつぶされてしまうのは、あまりにも惜しい。そのため『AD DREAM』プロジェクトの存在は必要最小限の関係者にしか知らされなかった。藤堂社長は突然の『ジョーズ』増産の理由を社員に説明できなかったため、現場では「社長も焼きが回った」「殿、ご乱心」などの声が数多く上がった。事情を知らされていない役員から詰め寄られることもあった。

そんな苦労も今夜で終わる。藤堂社長の顔は自然とほころんだ。間もなく私が正しかったことが証明される。これで社長の地位も安泰だ。それどころか三ツ葉飲料の中興の祖として高い評価を得ることになるだろう。

藤堂社長は念を押した。「何も問題は起きていないな？」

「全くございません。万事順調です！」田所が間髪を入れずに

答えた。山根教授が言っていた「副作用」のことが頭をかすめたが、今さらそんなことを気にしてられない。これはのるかそるかの大勝負なのだ。成功すれば昇進は間違いないだろう。あきらめかけていた役員への道も見えてくるかもしれない。それを考えれば、ちよつとした副作用など恐れるに足りない。

このプロジェクトのおかげでみんなが好きなることを自由にやるようになったら結構なことじゃないか。全く新しい世界が開けるかもしれない。おれは伝説の広告マンとして歴史に名を残せるかもしれない。役員の椅子も夢ではないかも……。田所の頭の中で妄想がとめどなく広がっていく。

午前零時——東京スカイツリーから『AD DREAM』の電波の送信が開始された。電波は首都圏全域をカバーし、300万人を超える人々の夢に侵入していった。

(了)

◆◆著者プロフィール◆◆

市川 夏久（いちかわ なつひさ）

二〇一三年四月、山村教室の受講生となる。

◆◆奥付◆◆

タイトル 「夢の広告」

著者 市川夏久

編集・発行 山村正夫記念小説講座 運営事務局

ウェブ管理 ウーニクス

本作品の一部、または全部を、無断で複製・転載・配信等を行うことを禁止します。

本作品を無断で改変等を行うことも禁止します。

権利の侵害となりますので、発行元に許諾をお求めください。